

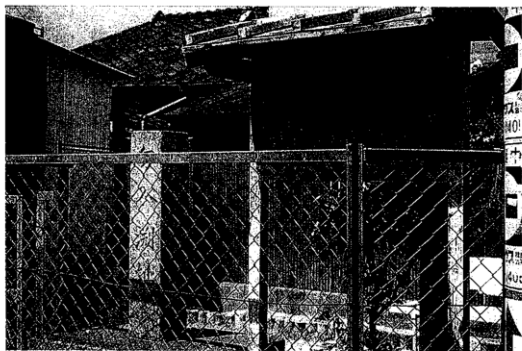
今昔物語 第47話

ないりそ  
勿入の淵

清少納言の枕の草子、第17段に「淵は……、ないりその淵、……。」と出てきます。「勿入」とは、強い禁止を表し、絶対に入ってはいけないという意味です。危険だから入ってはいけないという意味なのか、たくさん魚が捕れて、部

外者を入れようとしなかったのか、今ではよく分かりません。

古来、河内平野は大和川の流入する沼沢地で、江戸時代、東の深野池とは別に、市域、諸福から東大阪市、長田辺りにまで広がる勿入の淵があったといえます。所によつては、ナイスケの淵ともいい、内助の淵と書きま



した。これはナイリソがナイジョに転訛し、これに「内助」の字をあて、更にナイスケと読むようになったと思われま

宝永元（1704）年、大和川付替工事によつて河内平野は急速に新田開発されました。

※「勿入淵址」は諸福6丁目にあります。

今昔物語 第48話

万葉集の「生駒山」

難波門に漕ぎ出てみれば  
神さぶる生駒高嶺に  
雲そたなびく

「難波の港を漕ぎ出てみると、生駒の山に雲がたなびいている」  
足利郡（栃木県）から徴用され

た防人の歌です。任を終えても、故郷の地に帰る保証もなかった防人にとつて、最後に越えた生駒の山は、どのように映ったのでしょうか。雲がたなびいて、その雲が水際に映る、何か、古代河内湖の存在をほうふつさせるような歌です。

夕さればひぐらし  
来鳴く生駒山  
越えてそ吾が来る  
妹が目を欲り

「夕方になるとヒグラシが来て鳴く生駒山を越えてわたしは行く、あなたに会いたくて」

防人が悲しい思いで越えた生駒山も、若い人には心がたぎる山でもありません。万葉集には他にも数首若い恋人たちが生駒山に心を託した歌があります。

